

就学前施設の音楽アウトリーチ活動における 演奏者と聴衆の相関関係に関する一考察

A Study Report on Correlationship
between Performers and Audience in Musical Outreach Program.

山内 信子*

要約

本研究は、著者が幼稚園と連携して実施してきた親子コンサートの事例を分析し、就学前施設における幼児と保護者を対象とした音楽アウトリーチ活動のあり方について検証したものである。

検証の結果、親子コンサートは、その目的が大人を対象とする通常のクラシックコンサートのそれとは全く異なるために、演奏者としての技量もさることながら、幼児にふさわしい環境面の構成の配慮、すなわちプログラム構成や鑑賞教材の選曲といった企画の工夫やコンサート中の幼児への働きかけ、さらには保育現場の保育者等との事前の連携や会場整備等が、親子コンサートの質を高めるための重要な要素であるということが明らかになった。

日本での就学前施設における音楽アウトリーチ活動は黎明期を過ぎた段階にあると考えられるが、上記要素を十分考慮して実践することにより、今後より広く定着し、さらには幼児音楽教育の質を高める上で重要な役割を担っていくことが可能になると考える。

キーワード：アウトリーチ、音楽鑑賞、環境構成、コミュニケーション

はじめに

言語表現やコミュニケーション能力が発達段階にある幼児期において、音楽鑑賞や音楽表現活動等の美的体験は、幼児がそうした知識、能力を獲得し、さらには豊かな感性を育むために欠かせないものである。現在の「幼稚園教育要領」¹⁾では領域「表現」のねらいとして「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ」こととあり、また「保育所保育指針」²⁾には「豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培う」と示されている。さらに、リトミック教育創始者ダルクローズ（1865～1950）を専門とするF. W. アロノフ³⁾は「幼児音楽教育の目標は、美に対する幼児の感性を失わず、育ててゆくことである。」と述べている。したがって同時期における音楽表現活動は、そうした目的に対して、いかに音楽を優れた触媒として機能させるかが重要な課題であるといえよう。しかし、多くの就学前施

設において、幼児期の音楽教育は保育者らに委ねられており、音楽の専門教育者が指導にあたるケースは非常に稀である。したがって、幼児期における音楽表現活動は、音楽を専門としない指導者により幼児が音を通して豊かな感性を育む、という構図になっているのが現状であることが分かる。

上記の背景に対し、日本では以前から多くの自治体や学校主催で音楽の専門教育を受けた演奏家が幼児らに生演奏を披露し、優れた演奏を直に体験させる試みが行われている。こうしたいわゆる「鑑賞教室」や「訪問コンサート」などといった芸術鑑賞を目的とした活動は、岡部・鈴木（2010）⁴⁾によると、近年では「『アウトリーチ』という言葉キーワードに演奏家たちが様々な場所に出向き、対話や体験を重視した積極的な活動」として行われるようになった。この「アウトリーチ」とは、英語の「Outreach」の意味、「手をのばすこと、社会奉仕（福祉）活動」に由来した活動を指すが、音楽分野

* Nobuko YAMAUCHI 聖和短期大学 専任講師

1) 文部科学省 2008 幼稚園教育要領 教育出版 p.18

2) 厚生労働省編 2008 保育所保育指針解説書 フレーベル館 p.96

3) F. W. アロノフ著 畑玲子訳 1990 幼児と音楽 音楽之友社 p.35

4) 岡部裕美 鈴木香代子 2010 学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性 千葉大学教育学部研究紀要 第58巻 p.109

における「アウトリーチ活動」とは、公共文化施設や演奏家、芸術団体が主体となり、通常の活動範囲から踏み出して、日頃芸術分野に触れることの少ない市民に対して働きかけを行うことを意味する。

そこでは幼児が身近な存在である家族や友人、保育者らとともに音楽の美しさに触れ、感動を体験することにより、日頃の保育現場においても幼児自身に音楽そのものの楽しさを想起し、感性を育むことを目的としている。このことは大人を聴衆とする通常の演奏会とは全く異なるため、幼児にふさわしい環境面の構成、すなわち企画段階におけるプログラム構成や鑑賞教材の選曲等（以下「環境構成」と呼ぶ）について配慮する必要があるが、これには聴衆となる幼児や保護者の反応の想定が欠かせない。従来、通常の演奏会を前提として演奏技術を高めることを使命としてきた演奏家にとって、音楽アウトリーチ活動における聴衆、とりわけ幼児に対する環境構成の工夫は未知の分野であるといえよう。一般に、幼児期の音楽教育の重要性に関する認識は低くなくとも拘わらず、音楽アウトリーチ活動そのものが未だ広く定着しているとは言い難いのは、そうしたことも一因ではないかと考える。

1. 研究の概要

筆者は他の演奏者とともに、兵庫県西宮市 K 幼稚園の依頼により2004年から現在にかけて、また徳島県吉野川市 M 幼稚園の依頼により2005年から2013年にかけて、毎年12月に幼児及びその保護者らを対象としたクリスマスコンサートを開催してきた。開始当初は、幼児や保護者ら聴衆に対し前述のような「音楽鑑賞としての生演奏」に主眼を置いていたが、幼児期の音楽教育の意義を理解するに従い、大人向けの演奏会とは全く異なる幼児にふさわしい企画、演奏を行う必要性を痛感し、就学前施設における音楽アウトリーチ活動の環境構成について検証を重ねてきた。本稿では、2008年と2015年の親子クリスマスコンサートを実践事例として紹介し、演奏者による実施計画やその内容、聴衆や保育者らのアンケート調査結果等に基づき、音楽アウトリーチ活動のあり方について検証する。演奏者はいずれも音楽大学及び大学院にて専門教育を受けた3名[短期大学(保育者養成校)教員2名(ピアノ)及び高等学校音楽教員1名(声楽)]である。

2. 実践事例 I (2008年)

2-1 実施概要

事例 I (2008年) の実施概要は以下の通りである。

- ① 実施会場：西宮市 K 幼稚園、保育室4室をつなげた大部屋に高さ30センチの舞台設置。
実施日時：2008年12月5日 10時～11時
聴衆：在園児3歳児～6歳児155名、保護者68名、保育者等11名
- ② 実施会場：吉野川市 M 幼稚園、講堂、高さ50センチの舞台設置。
実施日時：2008年12月25日 14時～15時
聴衆：在園児と卒園児3歳児～10歳児100名、保護者25名、保育者等13名

2-2 実施計画と実施内容

事例 I の演奏者による実施計画・趣旨と実施内容は次の通りである。

[実施計画・趣旨]

- A 様々な楽器の音色や歌声といった生演奏を通じて、音楽鑑賞そのものを楽しめるようにする。
- B 季節を肌で感じ、クリスマス本来の意味を楽しみながら学べるようにする。

[実施内容(環境構成の工夫)]

A について：

- ・鑑賞と参加、さらにはアクティビティ(聴衆が主体となる活動)や視聴覚鑑賞を組み合わせ、子どもが長時間(60分)飽きないプログラム構成にした。
- ・童謡の多くが3分以内であることなどから、幼児が集中して鑑賞できる時間は1曲につき3分程度と想定し、その時間内に収まり、幼児になじみのあるものを選曲した。
- ・子育て世代の保護者にも満足してもらえるように、クラシック鑑賞曲を盛り込み、子どもと共に保護者も楽しむことができるようにした。

B について：

- ・幼稚園と連携し、コンサート当日に子どもと一緒に歌う曲は、日常の保育の中で事前に同じ歌詞で指導してもらった。
- ・視覚でもクリスマスの季節を感じ取れるようにするため、クリスマスを題材にした絵をプロジェクターで映し、クリスマスに関する絵本の朗読に生演奏を加えたオリジナル作品をプログ

表1 実施内容プログラム (2008年)

	作曲家/曲目	演目の形態	曲の種類	時間 (分)
1	フランスのキャロル/荒野のはてに	鑑賞型	クリスマスソング	2
2	ドイツ民謡/もみの木	鑑賞型	クリスマスソング	2
3	よろしくで握手	参加型	童謡	3
4	小林亜星/あわてんぼうのサンタクロース	参加型	クリスマスソング	3
5	J. マークス/赤鼻のトナカイ	参加型	クリスマスソング	3
6	フォーレ/「ドリー組曲」より スペインの舞曲	鑑賞型	クラシック	3
7	ベートーヴェン/よろこびの歌	鑑賞型	クラシック	3
8	プッチーニ/O mio babbino caro	鑑賞型	クラシック	3
9	きらきら星のハンドベルゲーム	参加型	アクティビティ	10
10	音楽絵本「クリスマスのおきゃくさま」 ⁵⁾	視聴覚鑑賞型		15
11	イギリスのキャロル/まきびと羊を	鑑賞型	クリスマスソング	2
12	ヘンデル/もろびとこぞりて	鑑賞型	クリスマスソング	2
13	J.S. ピアポント/ジングルベル	参加型	クリスマスソング	3
14	イギリス民謡/おめでとウクリスマス	参加型	クリスマスソング	3
15	久石譲/崖の上のポニョ	参加型	ヒットソング	3

計60分

ラムに盛り込んだ。

- ・非日常性を感じ取れるようにするため、演奏者の舞台衣装、舞台上の飾りつけをクリスマス仕様にした。

[プログラム]

プログラム (表1) について、本稿では以下のように演目形態を3つに分類した。

- ・鑑賞型…演奏家が奏でる音楽を聴衆が聴く形態。
- ・参加型…演奏家と聴衆が一緒に歌う、あるいは活動する形態。
- ・視聴覚鑑賞型…絵本をプロジェクターで映し出し、朗読に効果音としての生音楽を融合させた形態。

曲の種類については、本稿では以下のように5つに分類した。

- ・クリスマスソング…クリスマスの季節に演奏される作品。
- ・童謡…季節に関係なく歌われる子どものための作品。
- ・クラシック…クラシック作品。
- ・アクティビティ…聴衆が主体となる表現活動。
- ・ヒットソング…歌謡作品。

全15演目の形態を分析した結果、鑑賞型が7演

目、参加型が7演目、視聴覚鑑賞型が1演目であった。また曲の種類については鑑賞型曲、参加型曲、合わせて半分以上の8演目がクリスマス曲であった。

なお、演奏で使用した楽器はピアノ、電子ピアノ、ハンドベルで、演奏形態は独唱、ピアノ4手連弾、ハンドベル、電子ピアノとの合奏であった。

2-3 実践事例 I (2008年) のアンケート調査結果と考察

事例 I では保護者を対象としたアンケート調査を行った。実施内容は次の通り (表2) である。

調査方法: 選択式アンケート (一部自由記述記入あり)

調査時期: 西宮市 K 幼稚園、吉野川市 M 幼稚園でのコンサート終了直後。

対象者: 2008年12月「親子クリスマスコンサート」に参加した保護者、回答者35名 (有効回答率100%)

上の結果によると、「1. プログラム全体について」は97%の保護者が大変良かった、または良かったと回答している。「2. 今後のプログラム構成への希望」については、54%が参加型プログラムを期待し、「3. 良かった選曲」については子どもと一

5) 間所ひさこ作 かさいまり絵 2002 クリスマスのおきゃくさま 女子パウロ会

表2 アンケート内容 (2008年)

	質問内容	件数	割合%
1	音楽会全体について		
	とても良かった	23	66%
	良かった	11	31%
	ふつう	1	3%
	あまり良くなかった	0	0%
	良くなかった	0	0%
2	今後のプログラム形態についての希望		
	参加型プログラムを希望	19	54%
	鑑賞型プログラムを希望	10	29%
	ストーリー展開のあるプログラムを希望	3	9%
	無回答	3	9%
3	選曲について良いと思う分類 (複数回答可)		
	子どもと一緒に歌うクリスマス曲や童謡	28	49%
	クリスマスキャロルやクリスマスソング	17	30%
	クラシック鑑賞曲	12	21%
4	特に良かったと思うプログラム		
	音楽絵本「クリスマスのお客さま」	10	20%
	ベートーベン作曲「よろこびの歌」	8	16%
	ドレミの歌ハンドベルゲーム	6	12%
	プッチーニ作曲「O mio babbino caro」	5	10%
	赤鼻のトナカイ	5	10%
	よろしくで握手	5	10%
	フォーレ作曲「ドリー」組曲より「スペインの舞曲」	4	8%
	ジングルベル	4	8%
	崖の上のポニョ	2	4%
5	感想、意見等の自由記述 (考察参照)		

緒に歌うクリスマスソングや童謡が49%を占めていることから、半数の聴衆は幼児参加型プログラムを望んでいることがわかった。「4. 特に良かったプログラム名」での記述においては、「音楽絵本」が一番多く、絵本の内容がクリスマスの演出効果を高めていたものと推測される。また、「5. 意見、感想等の自由記述」では「普段子ども達が目にすることの少ないドレスで、一足早いクリスマスの雰囲気味わえた」「季節の行事(クリスマス)を肌で感じる事が出来る、素敵イベントだった」等の意見から、同時期の特別な行事として認識されていることが推察される。

以上の結果から、前述2-2で記した実施計画の趣旨A, Bについては概ね満たす内容であったと考え

られる。

その他、「ピアノの生演奏や歌声を聴くことができ、久々に豊かな時間をすごせた」「音楽会に行ける機会がないので久しぶりに癒された」と子育て世代である保護者の文化公共施設に足を運ばない現状と、幼稚園という日常の生活空間での演奏会の企画そのものに満足していることも明らかになった。

一方、プログラム構成については「子どもと大人と一緒に楽しめるプログラムにするにはバランスが難しいのでは」「子どもたちはクラシックの曲に興味を示しにくいので、ピアノ曲1曲、声楽1曲で子どものわかりやすい楽曲のほうが楽しめるのではないか」といった意見もあり、大人向けのクラシック

鑑賞曲と幼児向けの参加型曲とのコラボレーションへの配慮も必要と考えられた。

2-4 保護者からみた子どもの様子

アンケート調査の自由記述によると、保護者からは「未就園児と一緒に連れてきたが、最初から最後まで、飽きることなく楽しく過ごせた」「本格的な歌声が子ども達にもとても心に残ったようだ」「身近な形で本格的な音楽に触れられて子ども達も満足かと思う」等の意見が多くみられた。一方、「子どもたちには歌のない知らない曲だとすぐに集中力が切れるのが明らかにわかった」「演奏時間が長いと子ども達の集中力が切れ、ざわついていた」との意見に示されるように、子どもの集中力維持への工夫が必要だということが課題として残った。

2-5 演奏者からみた子どもの様子

演奏の合間に曲目説明や子どもへの問いかけを行ったが、いずれも反応がよく、挙手を求める場面では3分の2以上の子どもがそれに応じた。参加型クリスマスソングや童謡では、楽しそうに身体をゆらしながら歌っていた。

視聴覚鑑賞型「音楽絵本」ではプロジェクターで映しだされた絵に集中し、朗読者の言葉に耳を傾けようとする様子が見られた。鑑賞曲では、声楽家の声量に目を見開いて驚く子どもが多くみられる一方、鑑賞曲が3曲続いた後には、椅子にもたれ、足を投げ出し「退屈」のサインを出す子どもも見受けられた。アンコールでの映画ヒットソングでは、大人と子どもによる大合唱となり、再び子どもの積極参加がみられた。

3. 実践事例Ⅱ (2015年)

事例Ⅰのアンケート調査結果を基に、就学前施設における音楽アウトリーチ活動の環境構成を毎年検討しながら親子コンサートを実践してきた。その実践内容について、実践事例Ⅱとして2015年のコンサートについて紹介する。

3-1 実施概要

事例Ⅱの実施概要は以下の通りである。2015年は西宮市 K 幼稚園の実施のみ、会場は事例Ⅰと同じである。
実施会場：西宮市 K 幼稚園、保育室 4 室をつなげ

た大部屋

実施日時：2015年12月4日 10時～10時50分

聴衆：在園児 3 歳児～6 歳児154名、保護者61名、保育者等10名

3-2 実施計画と実施内容

事例Ⅱの演奏者による実施計画と実施内容は次の通りである。

[実施計画・趣旨]

- A 鑑賞型クラシックプログラムは聴くことに集中できるようにする。一方、参加型プログラムは楽しみながら幼児自ら主体的に表現できるようにする。
- B クリスマスを感じるとともに、なじみのあるクリスマスソングのルーツを知ることで、世界の国々へ関心を寄せる。

[実施内容 (環境構成の工夫)]

Aについて：

- ・鑑賞型クラシックについて、子どもが漫然と聞く状態になることを避け、飽きずに集中して聴けるようにするため、どの国で生まれた曲か説明する、あるいはクイズ形式で質問する等の問いかけを行った。
- ・プログラム全体を事例Ⅰより10分短く、50分にとどめ、子どもの集中力が持続する環境を整えた。
- ・事例Ⅰと同様、幼稚園との連携により、コンサート当日に歌う曲については事前に園と協議し、子どもがあらかじめ親しめるようにした。また、使う楽譜の歌詞について相互に確認し、保護者には歌詞付のプログラムを配布した。

Bについて：

- ・コンサートの主旨を明確にするために、テーマを「音楽でつづる世界のクリスマス」とした。また、当日のプログラムには、保護者向けのメッセージを掲載し、子どもへの働きかけの理解・協力を求めた。
- ・世界各国の国旗をホワイトボードに貼り、視覚情報を与えることにより、演奏曲からその国のイメージを想起させ、世界の国々に関心を寄せるように働きかけた。

[プログラム]

事例Ⅱのプログラム(表3)について、事例Ⅰと同様に演目形態を3つの型に分類した。

表3 実施内容プログラム (2015年)

作曲家/曲名	演目の形態	曲の種類	時間 (分)
1 DickSmith&FelixBarnard/ ウインターワンダーランド	鑑賞型	クリスマスソング	3
2 小林亜星/あわてんぼうのサンタクロース	参加型	クリスマスソング +リズム活動	5
3 ジョニーマクス/赤鼻のトナカイ	参加型	クリスマスソング +リズム活動	3
4 音楽でつづる世界のクリスマス			
①チャイコフスキー/くるみ割り人形より トレパーク	鑑賞型	クラシック	3
② M. レオントーヴィチ/鐘のキャロル	鑑賞型	クリスマスソング	3
③アーヴィング・バーリン/ホワイトクリスマス	鑑賞型	クリスマスソング	3
5 音楽絵本「サンタクロースがすねちゃった」 ⁶⁾	視聴覚 鑑賞型		15
6 乾裕樹/手をたたこ&ボディパーカッション	参加型	アクティビティ	3
7 ブラームス/ハンガリー舞曲第5番	鑑賞型	クラシック	3
8 マスカーニ/アヴェマリア	鑑賞型	クラシック	3
9 グルーバー/きよしこの夜	参加型	クリスマスソング	3
10 ジェームズ・ロード・ピアポイント/ ジングルベル	参加型	クリスマスソング	3

計50分

事例Ⅱのプログラム構成は、全12演目のうち、鑑賞型6演目、参加型5演目、視聴覚鑑賞型を1演目とし、その比率は事例Ⅰと概ね同様であった。

事例Ⅰとの相違は次の通りである。演目2, 3の参加型クリスマスソングはリズム活動を取り入れ、歌いながら子どもが自ら身体を使って音を鳴らし、表現することを試みた。演目6では、演奏者オリジナルの簡単なリズム唱を披露し、演奏者と子どもの両者によるリズム対話を試みた。また、クリスマスソングの比率を事例Ⅰより増やし、鑑賞型演目には、視聴覚教材を用いて子どもへの問いかけを盛り込んだ。こうした内容で構成した結果、クラシック鑑賞曲は声楽1曲、ピアノ1曲にとどまり、計50分のプログラムとなった。

なお、演奏で使用した楽器はピアノ、電子ピアノ、トーンチャイムで、演奏形態は独唱、ピアノ4手連弾、トーンチャイムと電子ピアノによる合奏であった。

3-3 実践事例Ⅱ (2015年) のアンケート調査結果と考察

事例Ⅱでは事例Ⅰで得られた保護者の見解を考慮し実施したコンサート内容について、第三者の見解

を得ることを目的として、表4で示した内容で保育者らを対象としたアンケート調査を行った。

実施方法：選択式アンケート（一部自由記述記入あり）

実施時期：コンサート終了後、後日、西宮市K幼稚園にて行った。

実施対象者：西宮市K幼稚園保育者等 回答者10名（有効回答率100%）

上の結果によると、「1. プログラム全体について」は全保育者が大変良かった、または良かったと回答している。「2. 良いと思うプログラム形態」については、80%が参加型プログラム、もしくはバランス型プログラムを、「3. 良いと思う選曲」については子どもと一緒に歌うクリスマスソングや童謡が85%を占めていることから、前回の保護者対象アンケート調査結果における反応と同様、保育者の立場においても幼児参加型を中心としたプログラムが良いと思っていることがわかった。この結果は「4. 印象に残ったプログラム名」「5. 子ども達が興味をもったと思われるプログラム名」における「手をたたこ」や「あわてんぼうのサンタクロース」等が上位にあることから裏付けられており、歌にリズム活動やボディパーカッション等を加え、幼児

6) ウテ・クラウゼ作・絵 若林ひとみ訳 1986 サンタクロースがすねちゃった 佑学社

表4 アンケート調査結果 (2015年)

	質問内容	件数	割合%
1	音楽会全体について		
	とても良かった	5	50%
	良かった	5	50%
	ふつう	0	0%
	あまり良くなかった	0	0%
	良くなかった	0	0%
2	良いと思うプログラムの形態		
	参加型プログラム	5	50%
	バランス型 (参加型、鑑賞型を組み合わせたもの) プログラム	3	30%
	視聴覚型 (映像等の視覚を中心とした) プログラム	2	20%
	鑑賞型プログラム	0	0%
3	選曲について良いと思う分類 (複数回答可)		
	子どもと一緒に歌うクリスマス・ソング	10	50%
	子ども向けの流行歌 (アニメや映画音楽、流行りの曲等)	4	20%
	子どもと一緒に歌うクリスマス・ソング以外の童謡	3	15%
	観賞用クリスマス曲	3	15%
	鑑賞用クラシック曲	0	0%
4	特に印象に残ったプログラム (複数回答可)		
	手をたたこ	8	29%
	音楽絵本「サンタクロースがすねちゃった」	5	18%
	ウインターワンダーランド	4	14%
	鐘のキャロル	3	10%
	あわてんぼうのサンタクロース	2	7%
	きよしこの夜	2	7%
	ジングルベル	2	7%
	チャイコフスキー「トレパーク」	1	4%
	マスカーニ「アヴェ・マリア」	1	4%
5	子ども達が興味をもったと思われるプログラム (複数回答可)		
	音楽絵本「サンタクロースがすねちゃった」	8	21%
	手をたたこ	7	19%
	あわてんぼうのサンタクロース	6	16%
	赤鼻のトナカイ	5	14%
	ジングル・ベル	5	14%
	きよしこの夜	3	8%
	チャイコフスキー「トレパーク」	2	5%
	マスカーニ「アヴェ・マリア」	1	3%
6	親子コンサートで期待するねらい		
	音楽そのものの美しさや楽しさを感じる	5	50%
	季節の行事 (クリスマスのイベント) を体験する	4	40%
	音楽の専門用語やクリスマスに関する知識を増やす	0	0%
	その他	1	10%
7	事前の連携についての自由記述 (考察参照)		
8	プログラムについての自由記述 (考察参照)		

を主体とする表現活動を工夫した効果だと推測される。また、「6. コンサートに期待するねらい」では保育者の殆どが「音楽そのものの美しさや楽しさを感じる」「季節の行事（クリスマスのイベント）を体験する」のいずれかを選択しており、これについては前述3-2で記した演奏者の趣旨 A, B と合致していることがわかった。「7. 事前の連携について」では「歌詞を事前に打ち合わせていたのが良かった」という意見がある一方で、「本番で使う物の出し入れ、幕引きのタイミングがよくわからなかった」や「当日リハーサル中の確認事項は慌ただしいので、十分な打ち合わせが出来ない」や「楽器や人の配置について改善の余地がある」等の意見が出され、保育者との事前の緻密な連携が求められていることがわかった。また、「8. 感想、意見等の自由記述」では、近年子どもの集中力維持が難しくなっているとの意見が多く寄せられ、その対策として「鑑賞と参加が交互にあったほうが良いのでは」「ずっと舞台に集中できるような工夫（お楽しみの時間や身体を動かす時間）が必要」等の提案があった。このことから、趣旨 A に該当する鑑賞プログラムについては、更なる環境構成への配慮が必要だと考えられた。

一方、コンサート終了後に「子どもたちから（保育者に）コンサートについて話しかけてきた」「トーンチャイムの音色や声楽家の声量について話し合った」「クラスで歌を歌う時にきれいな声をイメージしやすくなった」等の反応が見られたことから、音楽アウトリーチ活動としての一定の成果はあったと考えられる。

3-4 演奏者から見た子どもの様子

参加型クリスマスソングや童謡においては、演奏者の身振り手振りをそのまま楽しそうに模倣し、リズム活動では音楽のテンポが速くなる場面において興奮しながら必死にリズムを表現していた。

視聴覚鑑賞型「音楽絵本」では、朗読者のセリフを復唱する子どももあり、プロジェクターに映し出された絵と朗読、音楽に子どもが集中し、楽しんでいる様子がみられた。

鑑賞曲では、声楽家がマイクなしに歌うことに対し、その声量の大きさに驚きながら聴き入っていた。続いて実施した参加型クリスマスソングでは「私のように大きく口を開けてきれいな声で歌ってみてね」という演奏者の問いかけに、子どもの多くが反応し、大きく口を開けて歌う様子がみられた。

4. 実践事例の総括

一般的なクラシック音楽コンサートは、演奏者と聴衆には、演奏する側と聴く側という明確な役割分担があり、プログラム前後の拍手や特別な場合を除いてコンサートの最中にその分担が入れ替わることはない。この構図は従来の西洋音楽における芸術鑑賞の一つの完成形といえるが、幼児の音楽鑑賞のあり方を考えたときに、これらの構図がふさわしい形か疑問が残る。

井口⁷⁾は、ドイツの作曲家・音楽教育家カール・オルフ (1895-1982)⁸⁾の「Elementare Musik (エレメンタールな音楽)とは、…(中略)だれもがみずからすべきものであって、聴き手としてではなく、仲間として加わるような音楽…(中略)」という概念に着目し、「特に表現者と聴衆を分けないという考え方に大きな意味がある。」と述べている。

幼稚園での親子コンサートを通じ、特に幼児対象コンサートにおいて筆者は「演奏(表現)」と「その反応」は、音楽を媒体とする双方向型のコミュニケーションであるべきという考えに至った。したがって幼児対象のコンサートは、従来の演奏者対聴衆という一方向型の鑑賞形態ではなく、演奏者も聴衆もコミュニケーションがとれる双方向型の新たな鑑賞形態にするべく、環境構成を十分に配慮することが最も重要であるということがわかった。

おわりに

子どもにとって、多様な音楽に触れる機会が増え、音楽的刺激のある環境は好ましいことであろう。実際に、音楽心理学研究者である Hallam (1998年)⁹⁾は「教師、親、および若者の音楽活動の推進に携わっている人たちは、子どもたちに、さまざまな種類の創作や、音楽活動への参加が体験できるよ

7) 井口太監修 日本オルフ音楽教育研究会編 2015 オルフ・シュールヴェルクの研究と実践 朝日出版社

8) Orff, Carl 1963 Das Schulwerk-Rückblick und Ausblick ORFF-INSTITUT Jahrbuch B. Shott's Söhne, Mainz.

9) Hallam, S. 1998 *Instrumental teaching*. Oxford, Heineman

リチャード・パーンカット、ゲーリー・E・マクファーソン編 安達真由美 小川容子 監訳 2011 演奏を支える心と科学 誠信書房 p.42

うな実験的な機会を提供するよう心がけるべきである。」と述べている。注目すべきは、これに続く中で「最も重要となるのは、表現力や音楽性に関する専門技術・知識を提供するとともに、子どもの想像力やモチベーション全般を刺激するための問いかけを行うことだ。」と述べていることである。

しかしヤマハ音楽研究所の調査¹⁰⁾ (2013年)では、「子どもの通う幼稚園・保育所での音楽の専門家による音楽の時間 (音楽指導、鑑賞会など)」は「ない」という回答が2011年、2013年ともに全体の6割を超え、また、「(幼稚園や保育所以外の) ホールで行われるコンサートなどで子どもが音楽鑑賞する機会」も、「ない」という回答が2011年、2013年ともに全体の6割程度を占めていた。しかもこの結果は諸外国に比べ、日本がとりわけ多い傾向にあった。

さらに、日本芸能実演家団体協議会の実施した調査 (2008年)¹¹⁾ では、学校に芸術家・芸術団体からの指導者を「招いている・招く予定がある」が3割に留まる一方で、招いたことによる効果は「豊かな心や感性・創造性を育めた」が6割を超え、学年が低くなるほどにその割合が高くなることが明らかにされている。

政府は2015年5月に文化芸術振興基本法の第四次基本方針¹²⁾ で「子どもや若者を対象とした文化芸術振興等の充実」を挙げ、「学校における芸術教育の充実」を重点戦略としている。しかしながら、前述のようにヤマハ音楽研究所の調査や日本芸能実演家団体協議会の調査では、6割を超える幼児が、生活のほとんどの時間を過ごす教育・保育施設において、音楽アウトリーチ活動等の音楽指導や音楽鑑賞を享受していない実状が明らかになった。それらの理由として、前述の日本芸能実演家団体協議会は、予算と時間、少子化、生徒数減による学校規模の縮小等を挙げているが、筆者はこれに本稿で示したコンサートの基軸となる環境構成の必要性に係る起因課題も少なからず影響しているものと考ええる。

幼児が演奏家や音楽専門家による生演奏を鑑賞、体験することは知的・情緒発育面において意義あることと考えられる。しかし、そこでは「生演奏=良い」と安易に定義づけるだけでなく、演奏者自身が

幼児教育の音楽体験の場としてふさわしい環境構成を十分に配慮することが望まれる。つまり、就学前施設における音楽アウトリーチ活動においては、演奏者と聴衆が相互にコミュニケーションを図りつつ体験的音楽教育の場となるようなコンサートの内容と形態を構築し、保育現場の保育者等との連携を深めていけるようなコンサートのあり方を、演奏者自らが問い続けることに本質的意義があると考ええる。

実践報告をふまえた今回の研究から、今後は就学前施設における音楽アウトリーチ活動による具体的な効果について調査すると共に、その背後にある幼児期における音楽教育の本質的な意義についてさらに研究を深めていきたい。

引用文献

1. 文部科学省 2008 幼稚園教育要領 教育出版 p. 18
2. 厚生労働省編 2008 保育所保育指針解説書 フレーベル館 p.96
3. F.W.アロノフ著 畑玲子訳 1990 幼児と音楽 音楽之友社 p.35
4. 岡部裕美 鈴木香代子 2010 学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性 千葉大学教育学部研究紀要 第58巻 p.109
5. 間所ひさこ作 かさいまり絵 2002 クリスマスのおきゃくさま 女子パウロ会
6. ウテ・クラウゼ作・絵 若林ひとみ訳 1986 サンタクロースがすねちゃった 佑学社
7. 井口太監修 日本オルフ音楽教育研究会編 2015 オルフ・シュールヴェルクの研究と実践 朝日出版社
8. Orff, Carl 1963 Das Schulwerk-Rückblick und Ausblick ORFF-INSTITUT Jahrbuch B. Shott's Söhne, Mainz.
9. Hallam, S. 1998 Instrumental teaching. Oxford, Heineman
リチャード・パーンカット、ゲーリー・E・マクファーソン編 安達真由美 小川容子 監訳 2011 演奏を支える心と科学 誠信書房 p.42
10. ヤマハ音楽研究所 2013 現代における子どもと音楽とのかかわり—4, 5歳児の保護者へのアンケート調査結果から p.18-19
11. 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 2008 学校における鑑賞教室等に関わる実態調査 p.4
12. 日本国政府 文化芸術の振興に関する基本的な方針 2015年5月閣議決定

参考文献

1. 岡部裕美 2012 子育て支援としての継続的音楽アウトリーチの可能性 (1)

10) ヤマハ音楽研究所 2013 現代における子どもと音楽とのかかわり—4, 5歳児の保護者へのアンケート調査結果から p.18-19

11) 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 2008 学校における鑑賞教室等に関わる実態調査 p.4

12) 日本国政府 文化芸術の振興に関する基本的な方針 2015年5月閣議決定

—身体表現活動からコミュニケーション能力の向上へ—

千葉大学教育学部研究紀要 第60巻 p.215-220

2. 的場康子 2003 アウトリーチ活動の意義・課題についての一考察—現代における芸術文化の社会的役割— 第一生命経済研究所ライフデザインレポート p.26-35
3. 戸川晃子 2013 クラシック音楽の生演奏が未就学児に与える影響についての一考察 神戸常盤大学紀要 第6号 p.35-47
4. 日本ダルクローズ音楽教育学会編 2015 リトミック教育研究—理論と実践の調和を目指して— 開成出版
5. ドロシイ・ミール、レイモンド・マクドナルド、デーヴィッド・J・ハーグリーヴス編、星野悦子監訳 2012 音楽的コミュニケーション—心理・教育・文化・脳と臨床からのアプローチ— 誠信書房